

# 古屋敷Ⅱ遺跡

—町道芦岡寺7号線改良事業に伴う発掘調査—

1997年

立山町教育委員会

## 序

文化財は祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく、現在の文化を理解するためにも重要なものです。なかでも埋蔵文化財は地域の歴史に深く関係しており、郷土をよりよく理解するための鍵であるといえましょう。

このたび調査の行われた古屋敷II遺跡は、古屋敷段丘上に散在する遺跡群の一つであり、過去に縄文時代中期の住居跡が検出された古屋敷I遺跡などとともに、まとまった地域社会を形成していたと考えられている遺跡です。

今回の調査では、県内でも出土例の少なかった縄文時代晚期前葉から後葉の土器がまとまって出土し、古屋敷段丘における縄文時代集落の変遷を考える上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

終わりになりましたが、調査実施に当たり御協力をいただいた富山県と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

平成9年3月

立山町教育委員会  
教育長 金川 正盛

## 例　　言

1. 本書は町道芦崎寺7号線改良事業に伴う、富山県中新川郡立山町古屋敷II遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は立山町教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成8年5月23日～平成8年7月25日までの延22日間に行った。その後、報告書作成は平成9年3月31日まで行った。発掘面積は430m<sup>2</sup>である。
4. 調査事務局は立山町教育委員会に置き、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長開上寛が総括した。
5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と同学芸員柴垣智子である。
6. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示をいただいた。記して感謝の意を表します。
7. 遺物の注記は「TFY II」とし、次にグリッド名・層位・日付の順に付した。
8. 遺物整理・実測・製図は三鍋・柴垣が中心となり、河合忍・福石純子（富山大学大学院生）、工藤直子・田中幸生・中島義人・芳賀万里子・松本茂・宮崎順一郎・向井裕知・宿野隆史・三浦英俊・高志こころ・三浦智徳・磯村愛子・遠野いずみ・広瀬直樹（富山大学学生）が協力した。
9. 本書の編集・執筆は三鍋・柴垣が担当した。

## 目 次

|                     |    |
|---------------------|----|
| I 遺跡の位置と周辺の遺跡 ..... | 1  |
| II 調査に至る経緯 .....    | 2  |
| III 調査概要            |    |
| 1. 立地と層序 .....      | 2  |
| 2. 遺構 .....         | 2  |
| 3. 遺物               |    |
| (1) 土器 .....        | 5  |
| (2) 石器 .....        | 15 |
| IV 調査成果 .....       | 20 |
| 参考文献                |    |
| 写真図版                |    |

## 挿図目次

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 ..... | 1  |
| 第2図 地形と区割図 .....      | 3  |
| 第3図 調査区全体図 .....      | 4  |
| 第4図 遺物実測図 .....       | 8  |
| 第5図 遺物実測図 .....       | 9  |
| 第6図 遺物実測図 .....       | 10 |
| 第7図 遺物実測図 .....       | 11 |
| 第8図 遺物実測図 .....       | 12 |
| 第9図 遺物実測図 .....       | 13 |
| 第10図 遺物実測図 .....      | 14 |
| 第11図 遺物実測図 .....      | 17 |
| 第12図 遺物実測図 .....      | 18 |
| 第13図 遺物実測図 .....      | 19 |

# I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北21km、面積は308km<sup>2</sup>である。

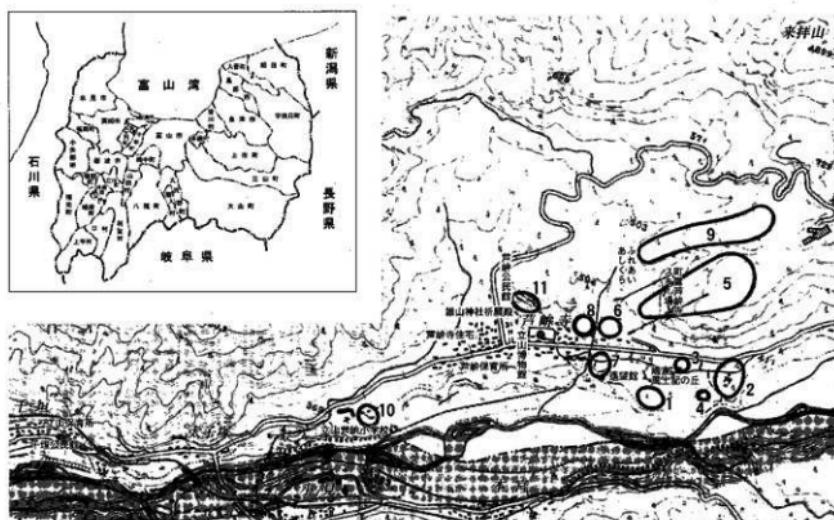
地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。

今回調査した古屋敷II遺跡は、芦峯寺集落の東方約700m、常願寺川中流右岸の段丘上、標高約400mの地点に所在する。この段丘は、中位段丘と低位段丘の中間に形成されたとみられているもので、古屋敷段丘と通称している。段丘面の縁辺部は段丘崖となっており、常願寺川の現在の河床との比高は約50mである。

北側には、不動平溶岩台地が迫り、その背後に来坪山が連なっている。常願寺川の上流方向に当たる東側には、弥陀ヶ原溶岩台地が迫り、その遠方に立山連峰が望まれる。

周囲には、縄文時代から近世に至る多数の遺跡が存在するが、特に姥堂川東岸の段丘上から不動平溶岩台地上にかけては縄文時代の遺跡が密集している。

これらの遺跡の中で古屋敷II遺跡に関連があるものとしては、中位段丘上には野口（縄文時代前～中期）・不動平B地点（縄文時代中～後期）の各遺跡が、一段低い古屋敷段丘上には古屋敷I（縄文時代中～後期）・古屋敷III（縄文時代前～後期）・古屋敷IV（縄文時代前～晚期）の各遺跡が、さらに不動平溶岩台地の先端部から西斜面にかけては不動平A地点（縄文時代中～後期）がある。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡  
(S=1/25,000)

## II 調査に至る経緯

古屋敷II遺跡が立地する河岸段丘は、かつてはトチ・ブナ等を主体とする落葉広葉樹林であったと考えられている。明治以降、杉の植林と開墾が進められた結果、段丘上平坦部は水田と畑地が大部分を占め、段丘崖などの斜面は杉林となり、ごく一部に雜木林が原植生を残している。

当遺跡では、以前から多くの縄文土器が採集されており、昭和61年、当遺跡を含む町南部の遺跡詳細分布調査が実施され、古屋敷II遺跡と名付けられた。

### 平成8年度調査

町道芦ヶ寺7号線の改良事業について、以前より地元から要望のあったところであるが、平成6年度に同事業の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、立山博物館・富山県埋蔵文化財センター・立山町教育委員会の3者協議が行われ、その結果、立山町教育委員会が主体となって、平成8年度に古屋敷II遺跡の発掘調査を実施することとなった。

調査期間は、平成8年5月23日～平成8年7月25日までの延22日間である。

## III 調査の概要

### 1 立地と層序（第1～3図）

古屋敷II遺跡は、芦ヶ寺集落の東約700m、立山町芦ヶ寺字古屋敷に所在する。一帯は、常願寺川によって形成された河岸段丘上にあたり、北側と東側には立山火山の噴火によって形成された溶岩台地が迫っている。

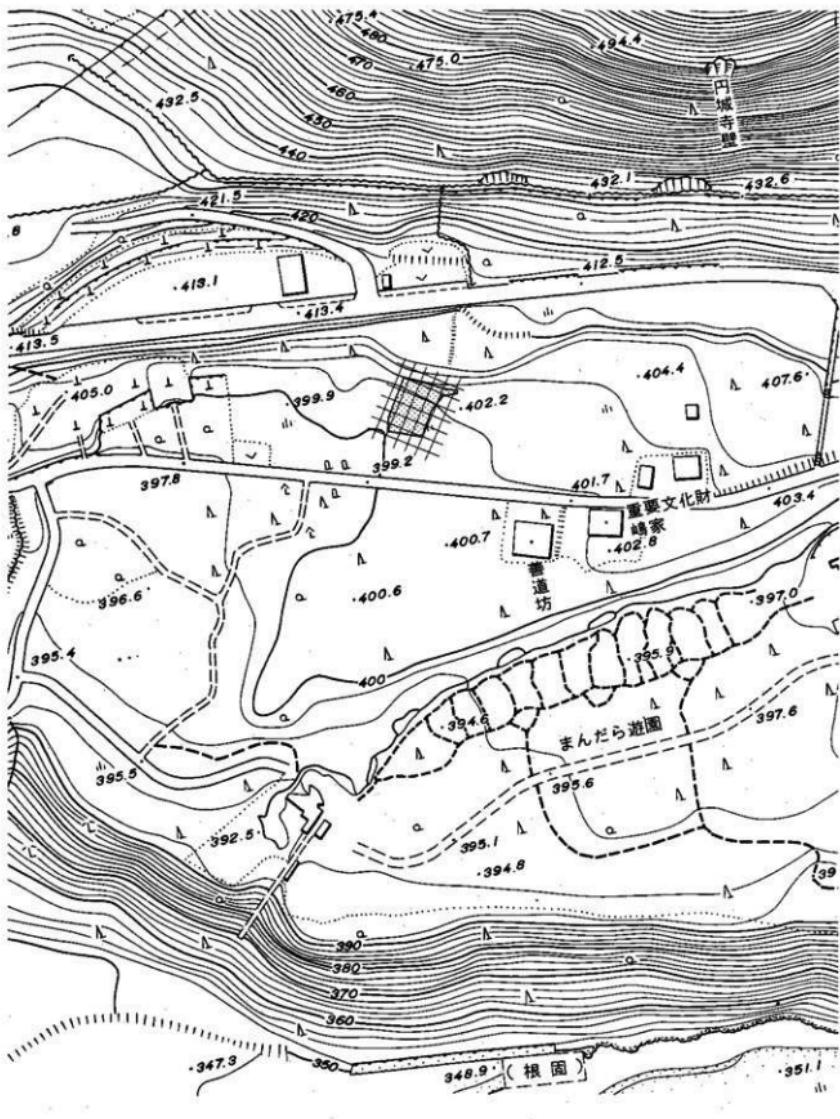
遺跡は、段丘が南側常願寺川方向に張り出して幅が最も広くなった部分のはば中央に位置し、古屋敷IV遺跡の西に隣接する。ここは中位段丘面の崖下、低位段丘面では最も高い部分にあたり、標高は約400mを測る。

調査区は北東から南西に向かってなだらかに傾斜する。層序は、第1層・耕作土、第2層・黒褐色土、第3層・茶褐色土、第4層・暗茶褐色土（地山）となっており、第2層が遺物包含層である。

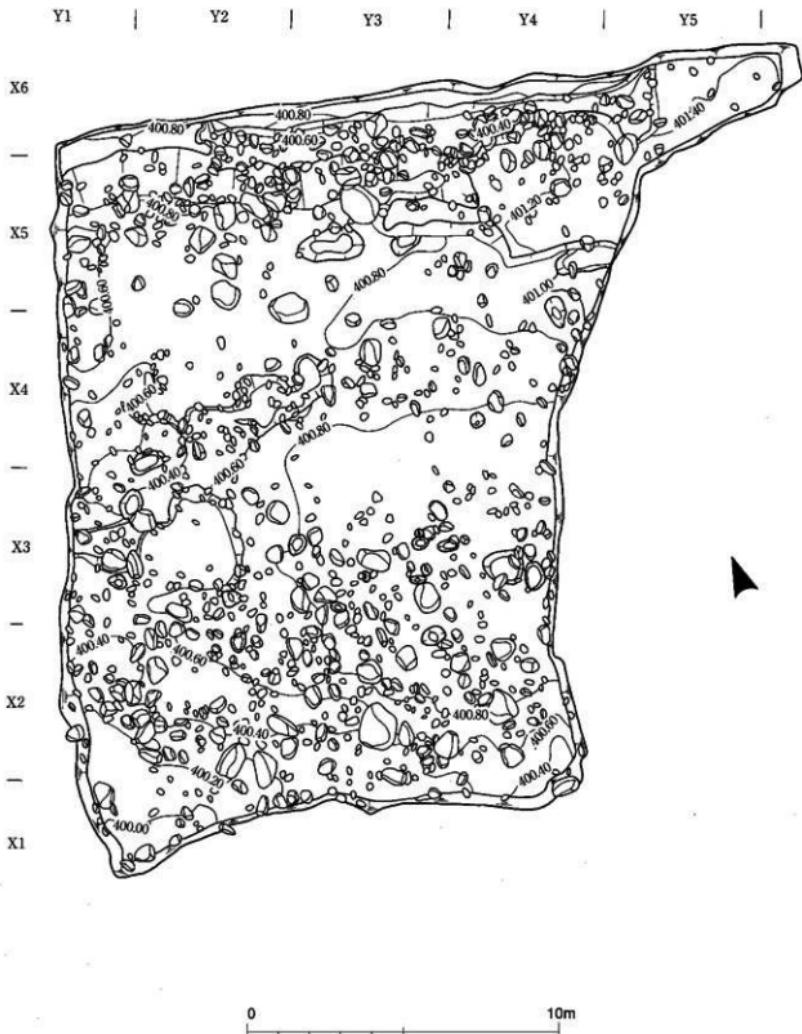
### 2 遺構（第3図）

今年度調査区で検出された遺構は、穴がわずかに1個であり、その他は自然流路や開墾の際に岩を取り除いた跡にとどまった。自然流路は調査区の北端に位置するが、擾乱が多く、この流路がどのように流れ、どのように埋まっていたのか明らかではない。また、最終検出面は人頭大の石を満載する。

このような状況の中、X4～5・Y1～2地区において土器溜まりを検出した。これは中位段丘の崖下という立地条件によるものと考えられ、遺跡の中心が中位段丘面に存在していた可能性を指摘できる。



第2図 地形と区割図



第3図 調査区全体図

### 3 遺物（第4～13図）

今回の調査では、すべての遺物が包含層から出土しており、遺構から良好な状態で検出し得たものはない。また、出土した遺物はすべて縄文時代に属するものである。

#### (1) 縄文土器（第4～10図）

##### 前期後葉（第8図17）

17は口縁が外反する器形となる。文様は細半隆起線によって構成されており、福浦上層式に比定できる。

##### 中期前葉（第8図18）

18はキャリバー形の深鉢の口縁部である。横位半隆起線の間に蓮華文が充填されており、新崎式に比定できる。

##### 中期中葉（第8図19～22） 上山田・天神山式から古市式にかけての時期のものである。

19は口縁直下の隆帯上にヘラ刻みが施され、内面にはバンド状に炭化物が付着している。

20はヘラ刻みの隆帯に半隆起線が伴走する。

21は口径23cmの深鉢で、口唇部は肥厚した粘土紐を貼り付けており、無文の半隆起線が加飾される。

22は緩やかな波状を呈する深鉢の口縁部で、口唇部は綾杉状の刻みを有する隆帯が巡る。

##### 中期後葉～後期前葉（第8図23～32） 串田新式～気屋式にかけての時期のものである。

23は外反する口辺に立ち上がり口縁を持つ器形となる。文様は隆帯と沈線で構成され、隆帯上には貝殻腹縁による押圧文が施されており、串田新式に比定できる。

24は口縁部が緩やかな波状を呈する深鉢で、口径24cmを測る。口縁にそって細隆起線文が巡り、頸部無文部分は研磨される。

25は口縁部が緩やかな波状を呈する鉢で、口径18cmを測る。隆帯上にはR L 縄文が押圧され、隆帯直上に3条の沈線が巡る。外面にはススが付着し、内面はていねいに研磨される。

26は口縁部がやや内擣して肥厚する平縁浅鉢で、口径18cmを測る。口唇部は面取りし、綾杉状に縄文が充填され、沈線で区画される。継位の隆帯上には縄文を充填し、無文部分及び内面は研磨される。

27は口径26cmの深鉢で、口縁が外反する器形と思われる。口縁部には棒状具により連続刺突が加えられており、外面にはススが付着している。

28は口縁部が外反したあと内擣気味に立ち上がる深鉢で、口径30cmを測る。口唇部には刻みが加えられ、口縁部から頸部にかけては連続する刺突文を施し、胴部外面及び内面は研磨される。器形と文様構成から気屋式に比定できる。

29は口縁が外反する波状口縁深鉢で、2条1単位の沈線により幾何学文様が描かれる。沈線は口縁部内面にも施され、交点には刺突が加えられる。気屋式に比定できる。

30は深鉢もしくは鉢の口縁部で、細かいL R 縄文を地文とし、弧線と直線を組合せた幾何学文様によって施文される。

31は沈線によって区画され、L R 縄文を地文とする。

32は深鉢もしくは鉢の底部で、L R 縄文を地文とし、幅広沈線によって弧線及び直線が描かれる。微量ながら赤彩が認められる。

##### 後期末葉（第9図33・34） 八日市新保式に比定できる一群である。

33は直線的に外傾する体部に緩く外反する口縁部がつく浅鉢で、口径24cmを測る。口縁部には平行する2条の沈線が巡る。

34は直線的に外傾する体部には直立する口縁部がつく浅鉢で、口縁部に横位沈線及び寸断文を施す。L R 縄文を

地文とし、外面には赤彩を施す。

**晩期前葉** (第9図35~41) 御経塚式に比定できる一群である。

35は波状口縁深鉢で、口唇部が内側に肥厚し、波頂部を面取りする。口縁部に沿って沈線が巡り、LR繩文を地文とする。

36は波状口縁深鉢で、口縁部にそって沈線が巡る。LR繩文を地文とし、外面にはスヌが付着している。

37は波状口縁深鉢で、口縁部にT字状の遊着三叉文と沈線を施す。RL繩文を地文とし、内外面ともに丁寧に研磨する。

38は波状口縁深鉢で、口縁部がやや内彎する。磨り消しによって口縁部の一部を無文とし、遊着三叉文と入組文を施文する。LR繩文を地文とし、外面にはスヌが付着している。

39は波状口縁深鉢で、口縁部内面に段を持つ。LR繩文を地文とし、波頂部に沿って沈線が巡る。外面にはスヌが付着している。

40は波状口縁深鉢で、内面に段を持つ。波頂部に沿って沈線が巡り、外面にはスヌが付着している。

41は体部破片で、外面には羊齒状文を施す。

**晩期中葉** (第4図1・2、第9図42~48) 中層式に比定できる一群である。

1は胴が張り、頸部で強く屈曲する波状口縁深鉢で、口径30cmを測る。頸部は磨り消しによる無文帯となり、肩部には押引列点文と鈎手状文を施文する。RL繩文を地文とし、外面には炭化物が付着している。

2は胴が張り、頸部で強く屈曲する深鉢で、口径37cmを測る。口唇部は押圧により小波状を呈し、頸部は磨り消しによる無文帯となる。肩部は沈線間に連続刺突文を施すとともに鈎手状文を施文する。LR繩文を地文とし、外面にはスヌが付着している。

42は楕状の浅鉢で、口径34cmを測る。口縁部内面に沈線、口唇部にT字形の沈線及び細い貼り付け隆帯間に繩文を施す。

43は沈線間に連続刺突文を施すとともに、鈎手状文を施文する。地文はRL繩文である。

44は深鉢もしくは壺の胴上半部で、弧線文を施す。LR繩文を地文とし、外面にはスヌが付着している。

45は弧線文と鈎手状文を施し、LR繩文を地文とする。

46は沈線間に連続刺突文を施すとともに、鈎手状文を施文する。外面にはスヌが付着している。

47は頸部での屈曲の弱い立ち上がり口縁風の器形となる深鉢で、口径25cmを測る。口縁部の付け根が分厚く、頸部は磨り消しにより無文帯となる。LR繩文を地文とし、外面にはスヌが付着している。

48は皿状の浅鉢で、口径32cmを測る。口唇部は全周に三角形の刻みを施す。横位条痕を地文とし、外面にはスヌが付着している。

**晩期後葉** (第4図3~第7図14、第10図49~62) 下野式に比定できる一群である。

3は胴の張りが弱く、口縁部が短く外反する鉢で、口径28cmを測る。頸部は磨り消しにより無文帯とした上で、沈線間に連続刺突文を施し、胴部は沈線間に連続刺突文及び鍵手文を施文する。地文は口縁部から胴上半部はRL繩文、胴下部はLR繩文である。

4は楕状の浅鉢で、口径37cmを測る。口唇部は8単位の山型突起を持ち、口縁部には沈線間に3段の連続刺突文を施す。

5は胴があまり張らず、口縁部は緩く「く」の字状に開く深鉢で、口径25cmを測る。口唇部は全周に「ハ」の字状の刻みを施し、外面にはスヌが付着している。

6は口縁部が緩く「く」の字状に開く深鉢で、口径34cmを測る。口唇部は連続押圧により小波状を呈し、地文は口

縁部から頸部は横位条痕、胴部は横位と斜位の条痕を併用する。外面にはススが、内面にはバンド状に炭化物が付着する。

7は口縁部が緩く「く」の字状に開く深鉢で、口径33cmを測る。口唇部は斜方向の刻みが施され、口縁部及び頸部は磨り消しにより無文となる。横位及び斜位の条痕を地文とし、外面にはススが付着している。

8は口縁部が緩く「く」の字状に開く深鉢で、口径50cmを測る。口唇部は押圧により小波状を呈し、横位及び斜位の条痕を地文とする。外面にはススが付着している。

9はバケツ形の鉢で、口径38cmを測る。口唇部は押圧により小波状を呈し、内面には炭化物が付着している。

10は胴が張り、頸部で強く屈曲する深鉢で、口径35cmを測る。口唇部には斜方向の刻みが施され、頸部には2条の沈線が巡る。地文は口縁部から胴上部は横位条痕、胴下部は縱位条痕となり、内面には炭化物が付着している。

11は刷があまり張らず、頸部で緩く屈曲する深鉢で、口径40cmを測る。口唇部は連続押圧により小波状を呈し、縱位条痕を地文とする。外面にはススが付着している。

12は縱位条痕を地文とする。底面に網代压痕が認められ、縦条・横条ともに压痕が隅丸方形を呈する。

13は斜位条痕を地文とし、底部から胴部内面には炭化物が一面に付着している。外面にはススが付着し、胴部下半から底部付近は2次比熱により赤化している。

14は深鉢もしくは鉢の底部で、斜位条痕を地文とする。底部に压痕を持つが、摩耗が激しく詳細は不明である。

49は沈線間に連続刺突文を施し、LR繩文を地文とする。外面にはススが付着している。

50は頸部で緩く屈曲する深鉢で、口径20cmを測る。多重沈線間に連続刺突文を施す。

51は沈線間に連続刺突文を施し、RL繩文を地文とする。外面にはススが付着している。

52は口縁部が内彎し、頸部で緩く屈曲する深鉢で、口径21cmを測る。口唇部には円形列点文を施し、外面にはススが付着している。

53は、頸部で強く屈曲する深鉢で、口径19cmを測り、外面にはススが付着している。

54は口縁部がやや外反する深鉢で、口径28cmを測る。口唇部には斜めの刻みを施し、横位条痕を地文とする。外面にはススが付着している。

55は口縁部がやや内屈する深鉢で、口径27cmを測る。口唇部には右ドガリの斜行沈線を施し、一部「ハ」の字状となる。口縁部は沈線間に列点文を施し、外面にはススが付着している。

56は胴部に指円文を施文する。

57は口径24cmの深鉢で、口唇部に3個1対の指円状の刺突を施文し、口縁部は多重沈線を施す。横位条痕を地文とし、外面にはススが付着している。

58は口縁部が内側に肥厚する浅鉢で、口径22cmを測る。胴上部に沈線を施し、羽状繩文を地文とする。外面にススが、内面には炭化物が付着する。石川県松任市長竹遺跡に類例があり、下野式期としたが他の時期の可能性もある。

59は頸部で緩く屈曲する深鉢で、口径23cmを測る。横位条痕を地文とし、外面にはススが付着している。

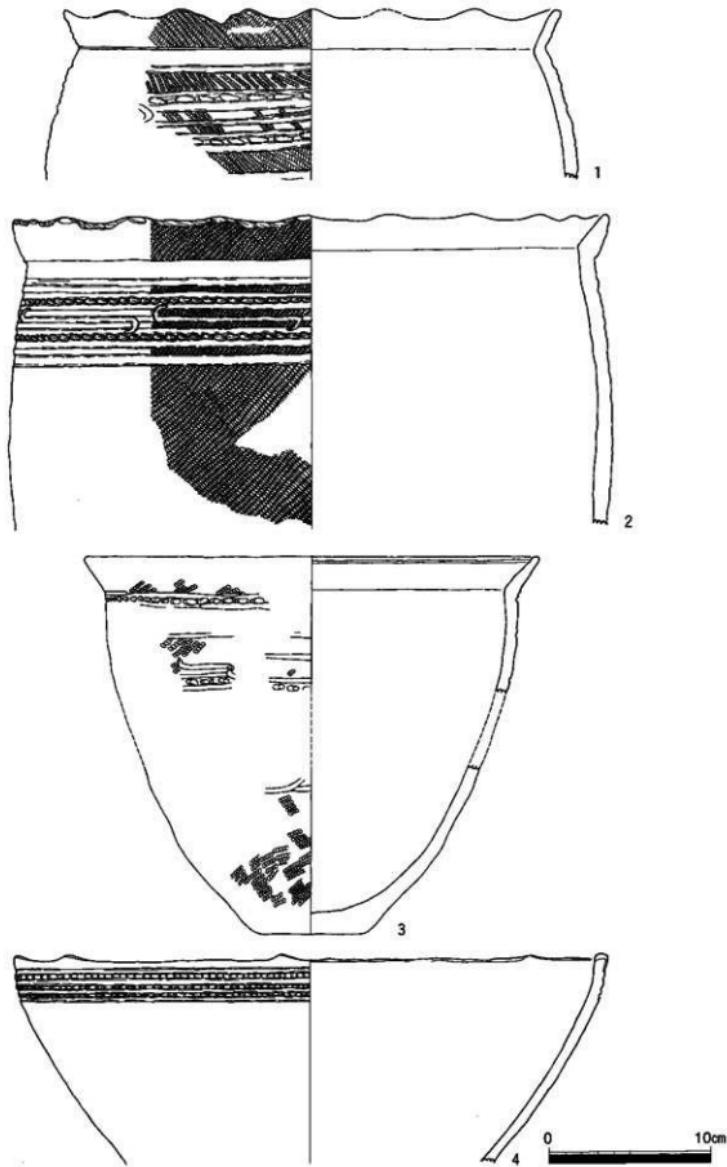
60は頸部で緩く屈曲する深鉢で、口径36cmを測る。口縁部は押圧により小波状を呈する。

61は口径34cmの深鉢で、口唇部には指円状の刻みを施す。

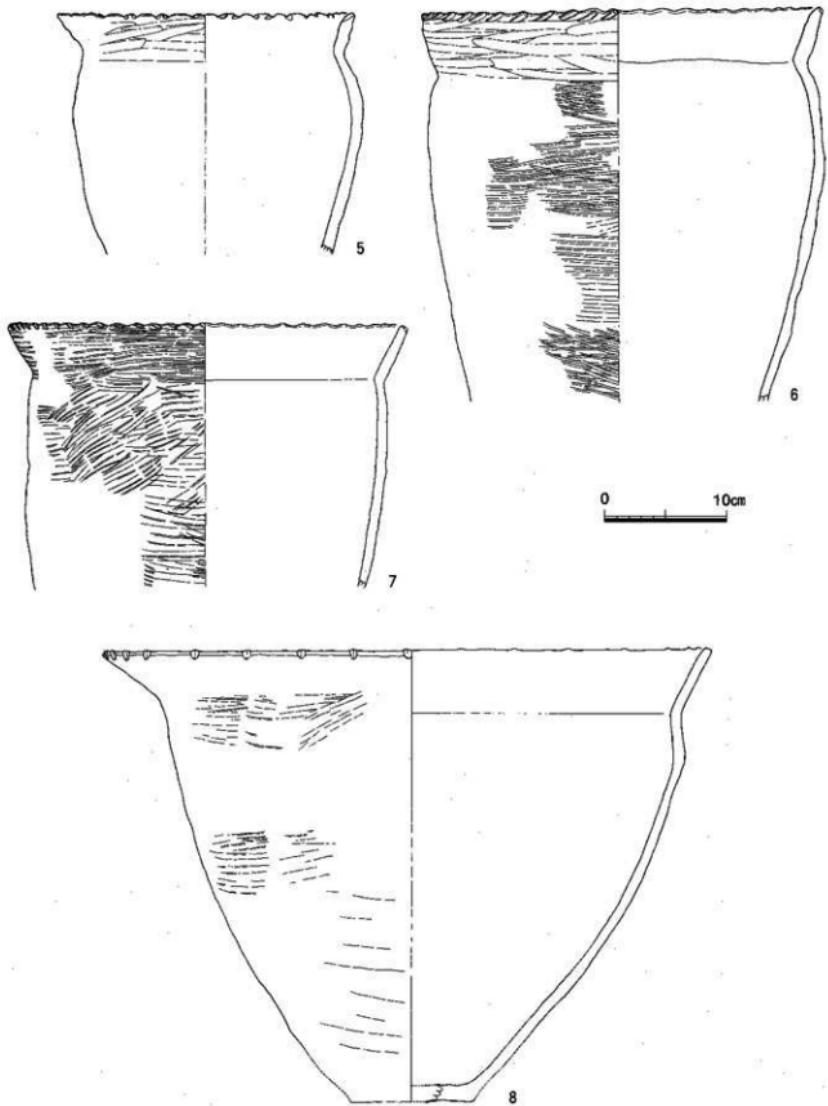
62は頸部で緩く屈曲する深鉢で、口径26cmを測る。横位条痕を地文とし、外面にはススが付着している。

搬入品（第10図63・64） 大洞B式期に比定できる一群である。

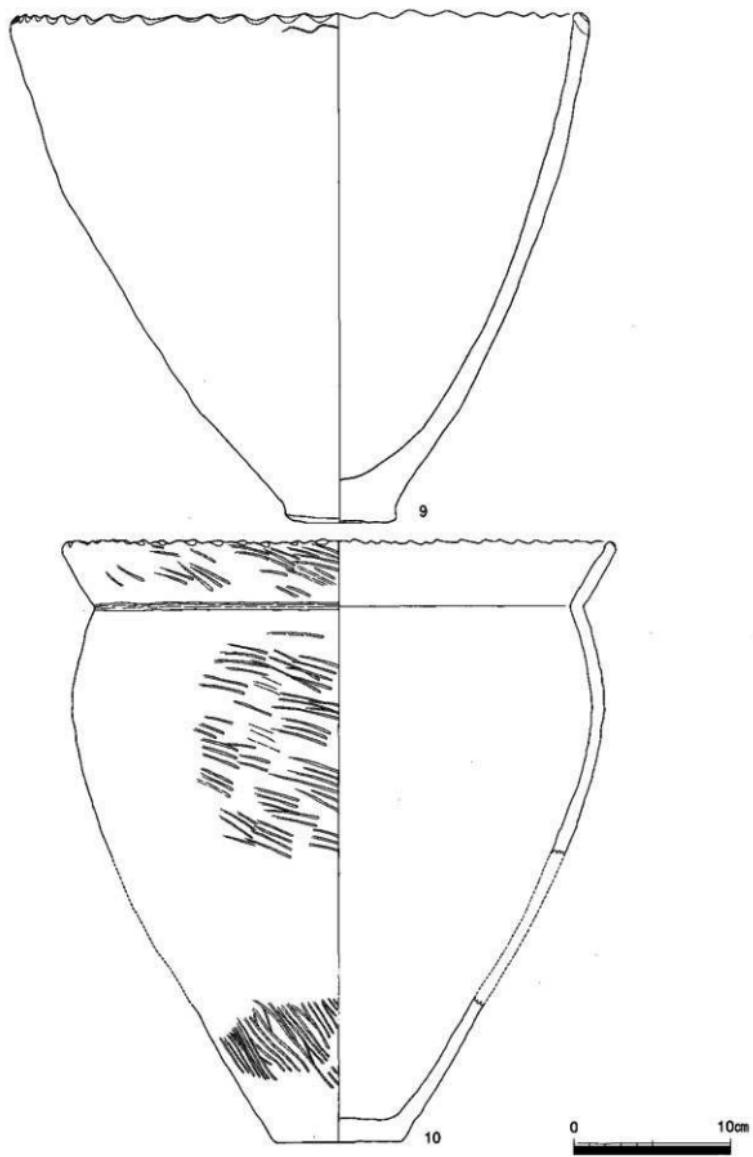
63・64は深鉢もしくは鉢で、口縁部は間のびした横S字状の曲線の末端が入り組み、咬合部を中心に上下に2個1対の三叉文を施文する。64は口径27cmで、口縁形態は波状を呈し、外面にはススが付着している。63・64は胎土、焼成より、搬入品と考えられる。



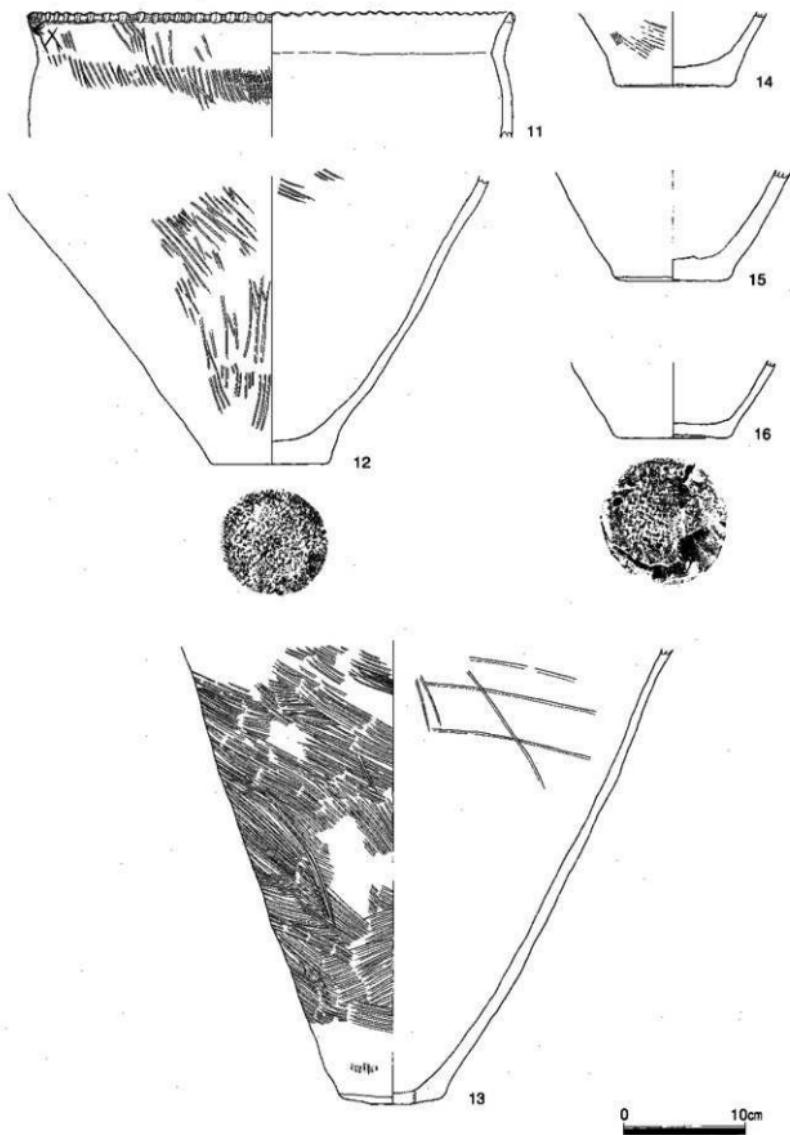
第4図 遺物実測図 1～4. 包含層



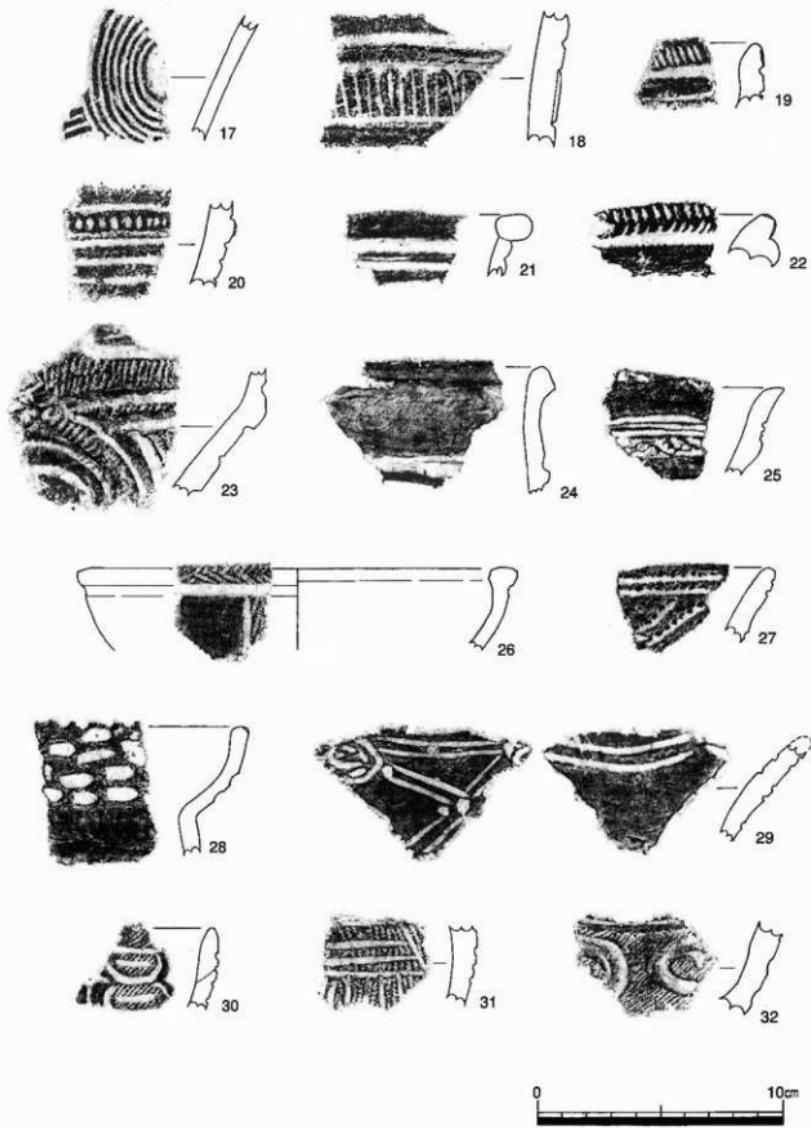
第5図 造物実測図 5～8. 包含層



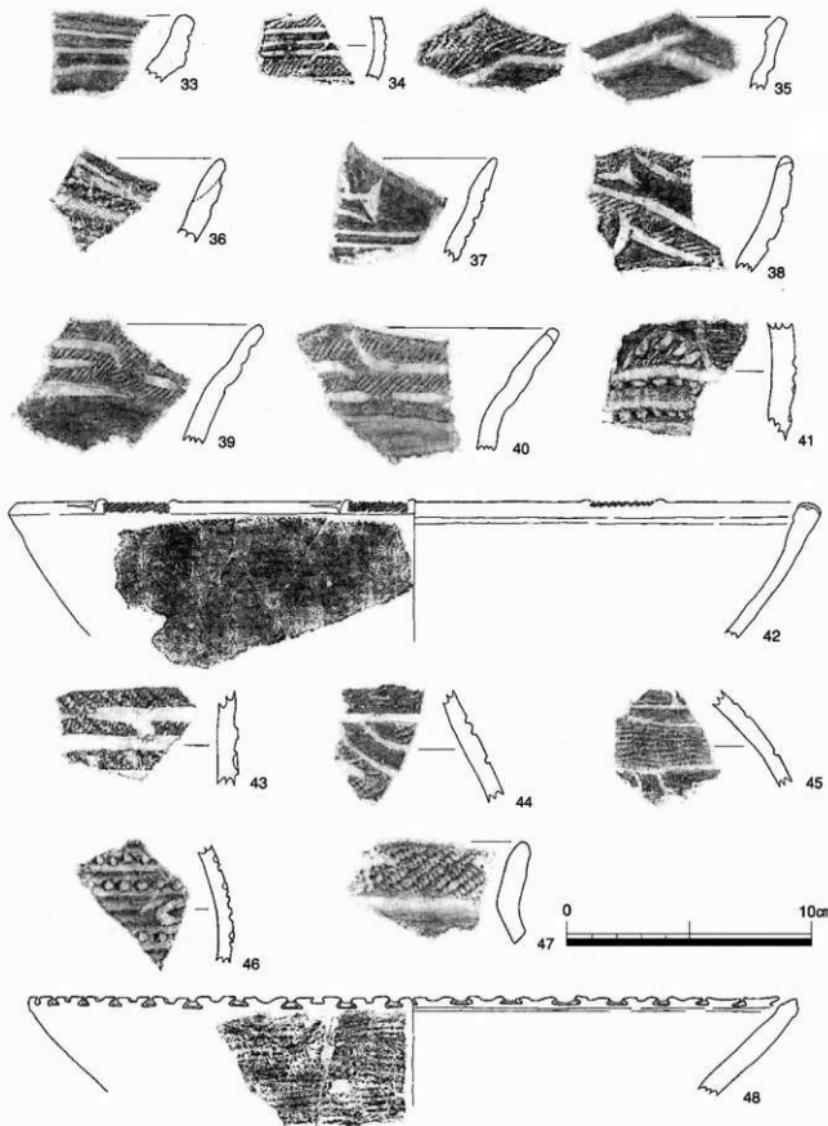
第6図 遺物実測図 9~10. 包含層



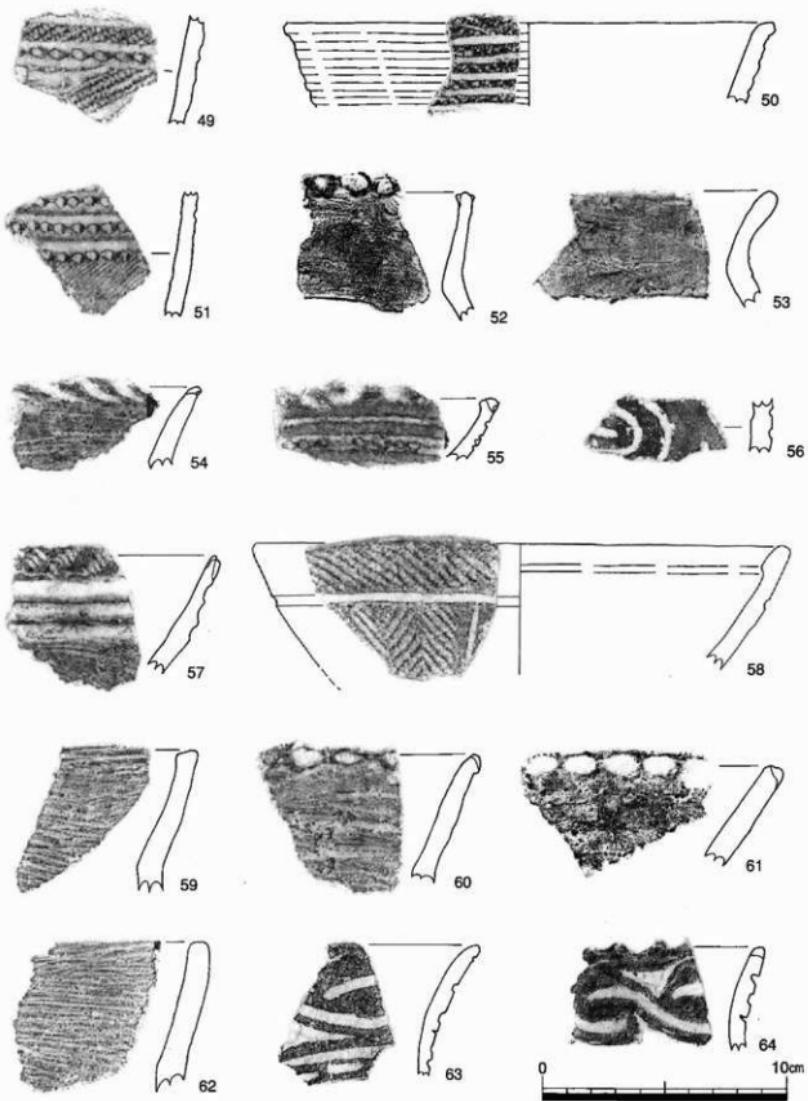
第7図 遺物実測図 11~16. 包含層



第8図 遺物実測図 17~32. 包含層



第9図 遺物実測図 33~48. 包含層



第10図 遺物実測図 49~64. 包含層

## 土器底部（第7図15・16）

15は底部に圧痕を持つが、劣化が激しく詳細は不明である。16は網代圧痕が認められ、縦条・横条ともに圧痕が隅丸方形を呈し、彫み方は2本越え2本済り1本ズレである。

## (2) 石器

### 磨製石斧（第11図65～75）

65はX5・Y1から出土し、形態は定角式である。最大長5.2cm、最大幅3cm、重量21.7gを測る。石材は蛇紋岩で、基部を欠損している。

66はX3・Y2から出土し、形態は定角式である。残存長4.5cm、最大幅3.3cm、重量24.6gを測る。石材は蛇紋岩で、基部を欠損している。

67はX4・Y2から出土し、形態は定角式である。残存長7.7cm、最大幅4.1cm、重量96.3gを測る。石材は蛇紋岩で、刃部を欠損している。

68はX2・Y1から出土し、形態は定角式である。残存長5.5cm、最大幅4.1cm、重量47.1gを測る。石材は蛇紋岩で、基部を欠損している。

69はX1・Y2から出土し、形態は定角式である。残存長6.7cm、最大幅4.1cm、重量92.8gを測る。石材は蛇紋岩で、基部を欠損している。

70はX5・Y3から出土し、形態は定角式である。残存長7.8cm、最大幅5.1cm、重量142.1gを測る。石材は蛇紋岩で、基部を欠損している。

71はX4・Y2から出土し、形態は定角式である。残存長4.7cm、最大幅5.2cm、重量89.3gを測る。石材は蛇紋岩で、基部・刃部ともに欠損している。

72はX4・Y3から出土し、形態は乳棒状を呈する。最大長8.4cm、最大幅4.4cm、重量167.3gを測る。石材は蛇紋岩で、刃部を欠損している。

73はX5・Y3から出土し、形態は定角式である。残存長6.3cm、最大幅4.3cm、重量104.9gを測る。石材は安山岩で、刃部を欠損している。

74はX5・Y2から出土し、形態は定角式である。残存長11.15cm、最大幅5.6cm、重量379.8gを測る。石材は蛇紋岩で、刃部を欠損している。

75はX4・Y1から出土し、形態は定角式である。残存長16.7cm、最大幅7.8cm、重量625.4gを測る。石材は蛇紋岩で、刃部を欠損している。

### 打製石斧（第11図76～第12図88）

76はX20・Y20から出土し、形態は短冊形を呈する。最大長10.7cm、最大幅4.6cm、重量139.5gを測る。石材は凝灰岩である。

77はX1・Y3から出土し、形態は撥形を呈する。最大長10.8cm、最大幅5.2cm、重量160gを測る。石材は凝灰岩質砂岩である。

78はX4・Y1から出土し、形態は短冊形を呈する。残存長9.6cm、最大幅4.3cm、重量68.2gを測る。石材は凝灰岩で、基部を欠損している。

79はX5・Y4から出土し、形態は撥形を呈する。最大長9.2cm、最大幅3.9cm、重量67.6gを測る。石材は凝灰岩である。

80はX4・Y2から出土し、形態は短冊形を呈する。最大長12cm、最大幅5.5cm、重量211.3gを測る。石材は凝灰

岩である。

81はX1・Y3から出土し、形態は撥形を呈する。残存長8.2cm、最大幅5.3cm、重量131.3gを測る。石材は凝灰岩で、刃部を欠損している。

82はX5・Y1から出土し、形態は短剣形を呈する。残存長7.5cm、最大幅4.8cm、重量136.7gを測る。石材は凝灰岩で、刃部を欠損している。

83は試掘の際に出土したもので、形態は短剣形を呈する。残存長9cm、最大幅5.1cm、重量126.4gを測る。石材は凝灰岩で、基部を欠損している。

84はX1・Y2から出土し、形態は短剣形を呈する。残存長10.6cm、最大幅6.7cm、重量320.5gを測る。石材は凝灰岩で、基部を欠損している。

85はX4・Y1から出土し、形態は撥形を呈する。残存長10.2cm、最大幅7.7cm、重量265.5gを測る。石材は凝灰岩で、基部を欠損している。

86はX4・Y2から出土し、形態は撥形を呈する。最大長12.4cm、最大幅8.2cm、重量254.1gを測る。石材は凝灰岩である。

87はX4・Y5から出土し、形態は撥形を呈する。残存長12.8cm、最大幅6.4cm、重量235.6gを測る。石材は凝灰岩で、基部を欠損している。

88はX5・Y3から出土し、形態は撥形を呈する。最大長7.5cm、最大幅4.8cm、重量136.7gを測る。石材は凝灰岩である。

#### 叩き石（第12図89）

89は試掘の際に出土したもので、形態は円形を呈する。最大長9.9cm、最大幅9.8cm、重量533.4gを測る。石材は砂岩である。

#### 砥石（第12図90）

90はX4・Y1から出土し、形態は方形を呈する。最大長7.8cm、最大幅5.1cm、重量115.3gを測る。石材は硬質の砂岩である。

#### 石匙（第13図91）

91は横型石匙で、X2・Y2から出土した。最大長3.1cm、刃部幅3.5cm、重量5.8gを測る。石材はチャートである。

#### 石核（第13図92）

92はX6・Y4から出土したもので、最大長5.5cm、最大幅3cm、重量18.2gを測る。石材は下呂石である。

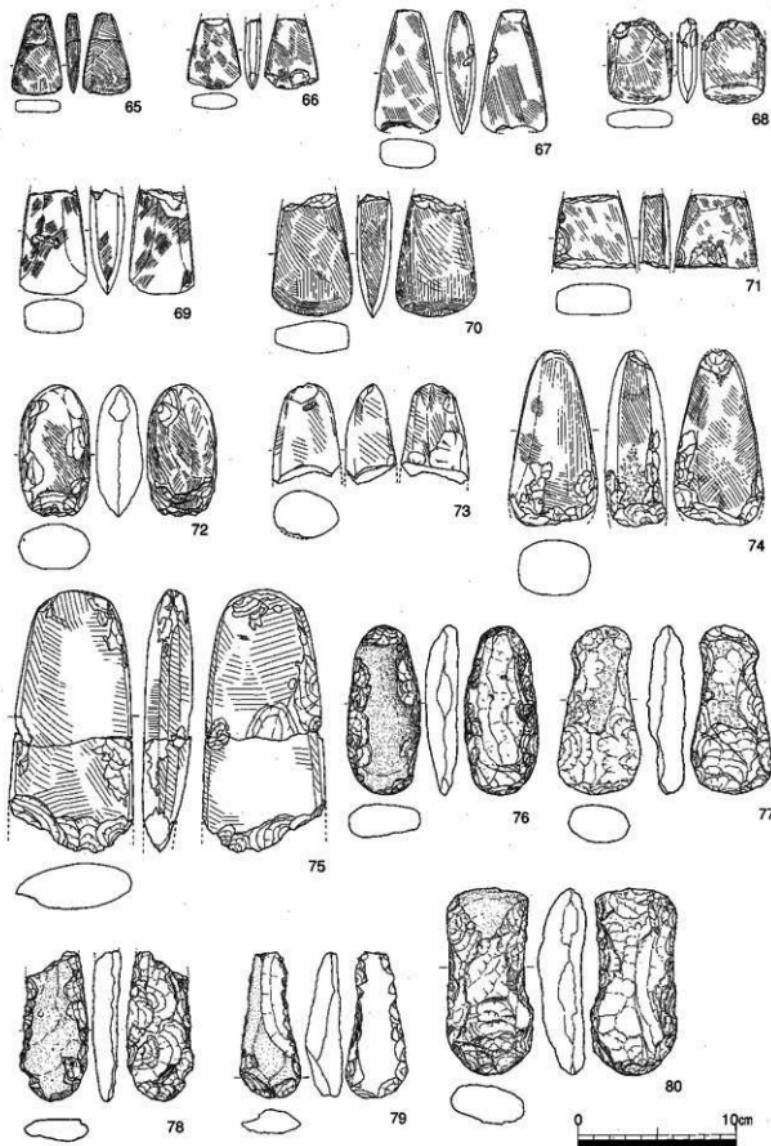
#### 剥片（第13図93・94）

93はX4・Y1から出土したもので、最大長3.5cm、最大幅0.4cm、重量2.4gを測る。石材は下呂石で、一部に使用痕がみられる。

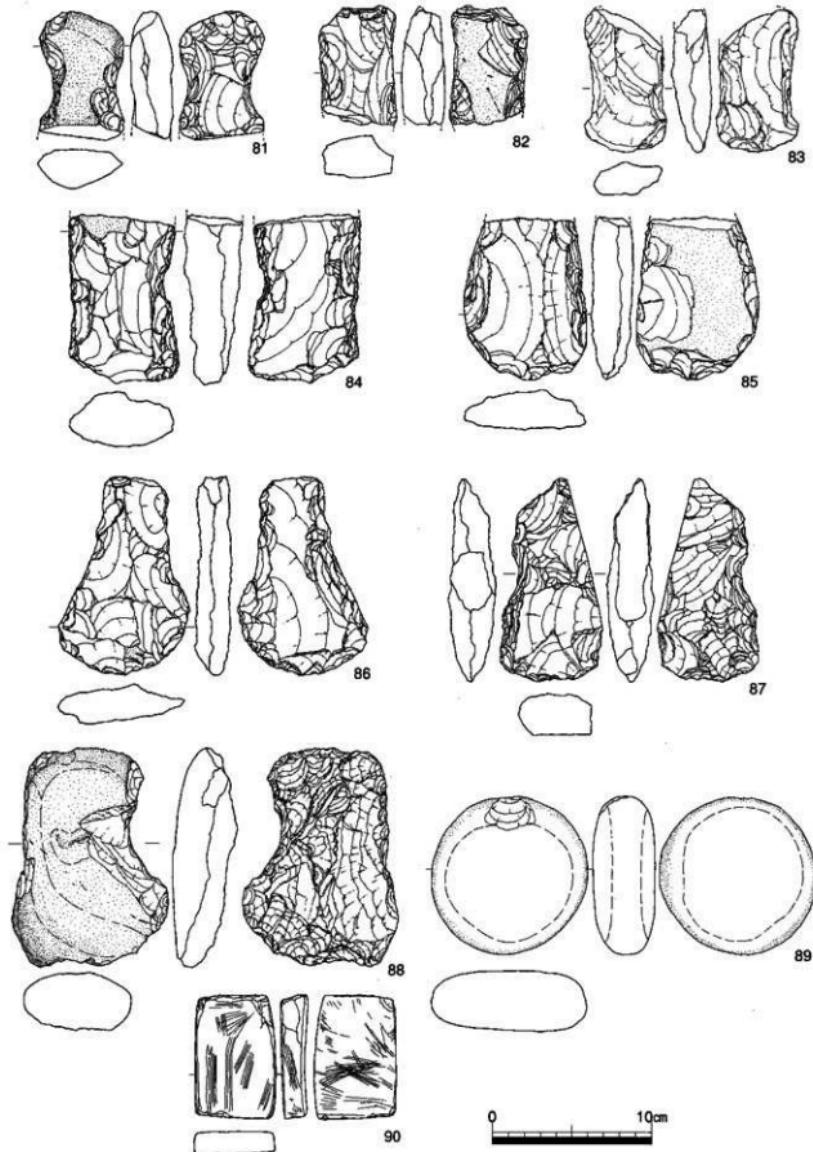
94は撥亂から出土したもので、最大長3.1cm、最大幅2.8cm、重量8.3gを測る。石材はメノウで、一部に使用痕がみられる。

#### 磨製石刀（第13図95）

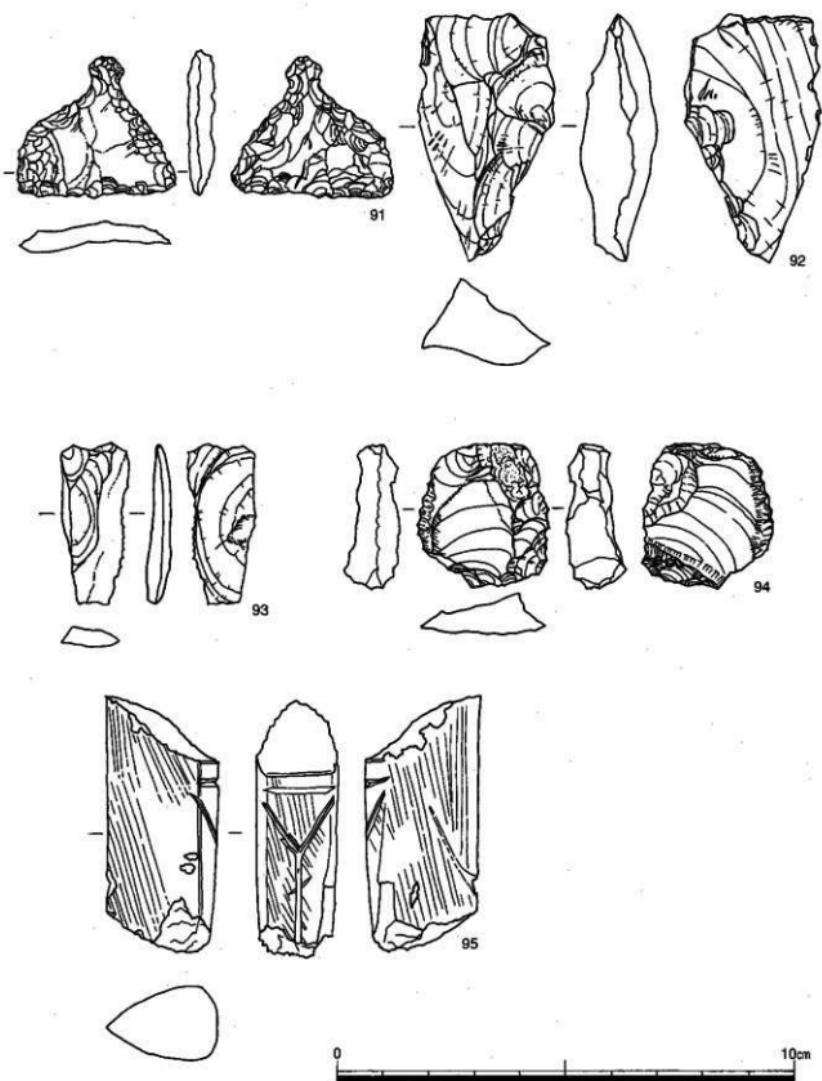
95はX5・Y3から出土したもので、残存長5.6cm、最大幅2.5cm、重量34.8gを測る。石材は黒色粘板岩で、背刃には三叉文と1条の溝を持つ。



第11図 遺物実測図 65~80. 包含層



第12図 遺物実測図 81~90. 包含層



第13図 調査区区割図 91~95. 包含層

## IV 調査成果

本年度の調査で得られた新知見は以下の通りである。

1. 古屋敷II遺跡は、常願寺川によって形成された河岸段丘上に、古屋敷I・III・IV遺跡、不動平遺跡、野口遺跡とともに、遺跡群を形成して存在する。

遺跡群の広がりは、南北800m、東西900mで、溶岩台地からその斜面、高・中・低位の各河岸段丘面に立地し、標高は390mから620mにかけてである。

以後、この遺跡群を古屋敷遺跡群と呼称する。

2. 古屋敷II遺跡の遺跡群中の位置は、ほぼ中央にあたり、各遺跡間の交通の要といえる場所にある。

3. 遺構は穴がわざかに1個だけであるが、中位段丘面の崖下という立地条件により、X4～5・Y1～2区で土器ダマリを検出した。

4. 遺物は、全て遺物包含層からの出土であり、前記の土器ダマリとその周辺からの出土量が多い。

土器は全て縄文時代に属し、前期から晩期のものまでが出土しているが、晩期前一後葉のものが主体を占める。

石器は全て縄文時代に属するものである。打製及び磨製石斧が量的に大部分を占める。なお、石刀の刃部破片が1点出土している。

以上の調査成果より、古屋敷II遺跡の性格は次のように考えられる。

遺跡の存続年代は、縄文時代前期後葉から晩期後葉にかけてであるが、前期後葉から後期前葉にかけての遺物の出土状況は散発的であり、晩期に盛期を持つものと考えられる。

そして、かなりまとまった量の土器・石器が出土している点や、晩期の御経塚式期から下野式期にかけての土器がコンスタントに出土する点等から見て、縄文時代晩期における遺跡群の中心集落であった可能性が高い。

ただし、遺構が殆ど存在しない点と、遺物の大部分が土器ダマリとその周辺から出土した点を併せて考えると、現在古屋敷II遺跡としている地点は遺跡の本体ではなく、遺跡の中心となる集落跡は一段上の中位段丘面にあるものと推測する。しかし、その中位段丘面にはかなり以前に県道が通り、道の両側には大型の駐車場が造成されて昔日の姿を失っているため、遺跡の本体から情報を得るのはほぼ絶望的であり残念なことである。

なお、約300m西方の高位段丘上に立地する不動平遺跡B地点において平成元年に行われた発掘調査では、晩期後葉に属する住跡1棟と木柱列等が検出されており、晩期の集落跡であることが確認されている。この不動平遺跡B地点集落と古屋敷II遺跡集落との関係については、立地する段丘面の相違などから、現時点では同時並行的に存在した別集落と考えたい。

(三編)

## 参考文献

- イ 石川県教育委員会 1977 「松任市長竹遺跡発掘調査報告書」
- カ 加藤三千雄 1988 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』 小学館
- ダ 犬野陸 1988 「串田新・大杉谷式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』 小学館
- ダ 犬野陸・酒井重洋 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編6 一境A遺跡土器編」 富山県教育委員会
- コ 小島俊彰 1979 「本江遺跡」『滑川市史考古資料編 滑川市史編さん委員会
- 小島俊彰 1981 「井口式土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣
- 小島俊彰 1988 「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』 小学館
- 小林正史 1991 「土器の器形と炭化物から見た先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』創刊号  
北陸古代 土器研究会
- シ 島田修一 1985 「(3)出土遺物 A土器」『長山遺跡発掘調査報告』 八尾町教育委員会
- ス 鈴木次郎 1983 「打製石斧」『縄文文化の研究7』 雄山閣
- 鈴木道之助 1991 「圓錐 石器入門辞典 縄文」 柏書房
- タ 高麗勝喜 1983 「野々市町御経塚遺跡」 野々市町教育委員会
- 立山町教育委員会 1985 「富山県立山町総合公園内野沢狐塚遺跡発掘調査概要」
- 立山町教育委員会 1993 「古屋敷III遺跡—発掘調査報告—」
- 立山町教育委員会 1994 「古屋敷IV遺跡—発掘調査報告—」
- ナ 水峰光一 1981 「中部・北陸地方」『縄文土器大成4』 講談社
- ニ 西野秀和 1983 「縄文時代の遺物」『鹿島町史前C遺跡調査報告(IV)』 石川県立埋蔵文化財センター
- ノ 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 「真脇遺跡」
- ハ 橋本正 1970 「立山町吉峰遺跡発掘調査報告書」 富山県教育委員会
- 橋本正 1972 「三、縄文早・前期」『富山県史』考古編
- 橋本正・酒井重洋・久々忠義 1980 「富山県井口村井口遺跡発掘調査概要」 井口村教育委員会
- フ 薩沼邦彦 1989 「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』 小学館
- ミ 渡 辰 1972 「三、縄文後・晚期」『富山県史』考古編
- 南久和 1989 「北陸晚期土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』 小学館
- 南久和 1992 「金沢市中塙サワ遺跡」 金沢市教育委員会
- モ 森秀典・山崎典子・川端幸江 1991 「立山町芦嶺寺不動平遺跡」「大境 第13号」 富山考古学会
- ヤ 安田良栄 1977 「舞土のあけぼの」『立山町史』上巻
- 山本正敏 1990 「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編5 一境A遺跡 石器編」 富山県教育委員会
- 山本正敏・林浩明 1990 「安居五百歩遺跡I」 福野町教育委員会
- ヨ 古岡康暢 1971 「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56卷第4号 日本考古学会
- 米沢義光 1989 「氣屋式土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』 小学館



図版 2

調査区全景  
(上から)



調査区全景  
(東から)



図版 3

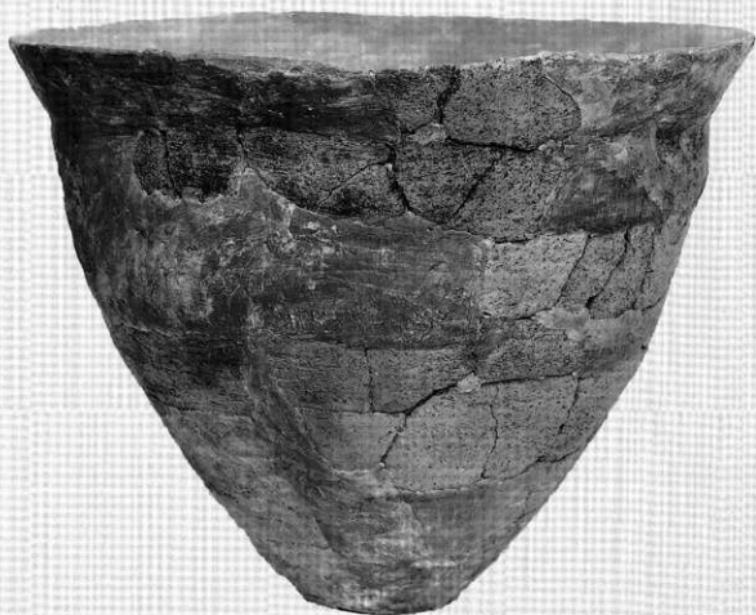
遺物写真  
包含層



1



2



3

図版 4  
遺物写真  
包含層



3



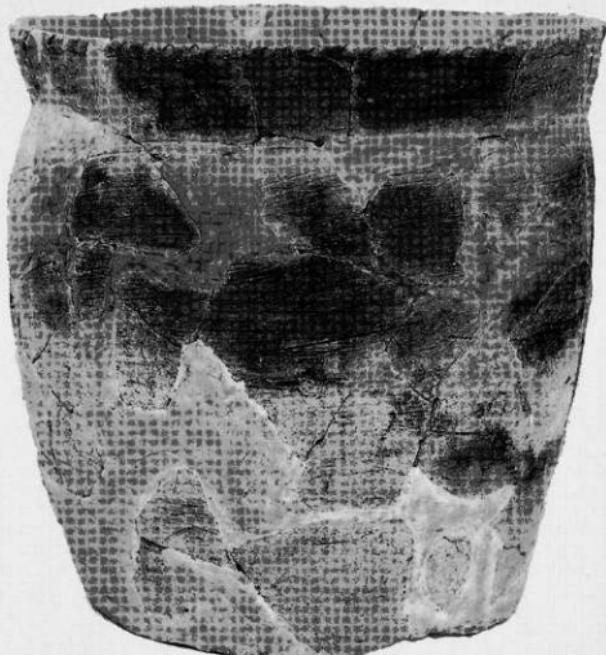
7



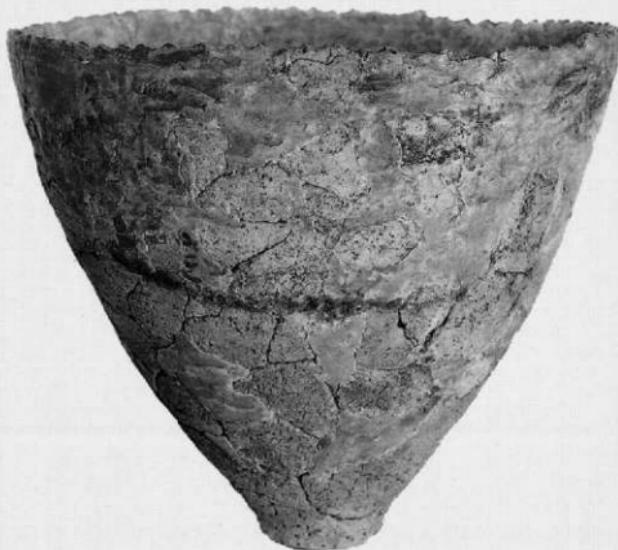
10

図版 5

遺物写真  
包含層



6



9

図版 6

遺物写真  
包含層



17



18



23



19



25



21



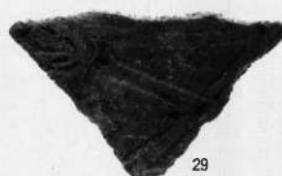
22



26



27



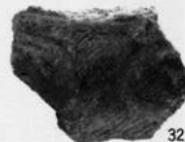
29



30



31



32



20



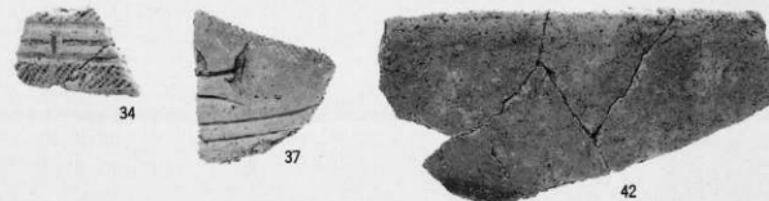
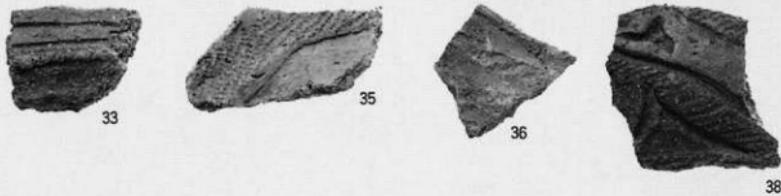
28



24

図版 7

遺物写真  
包含層



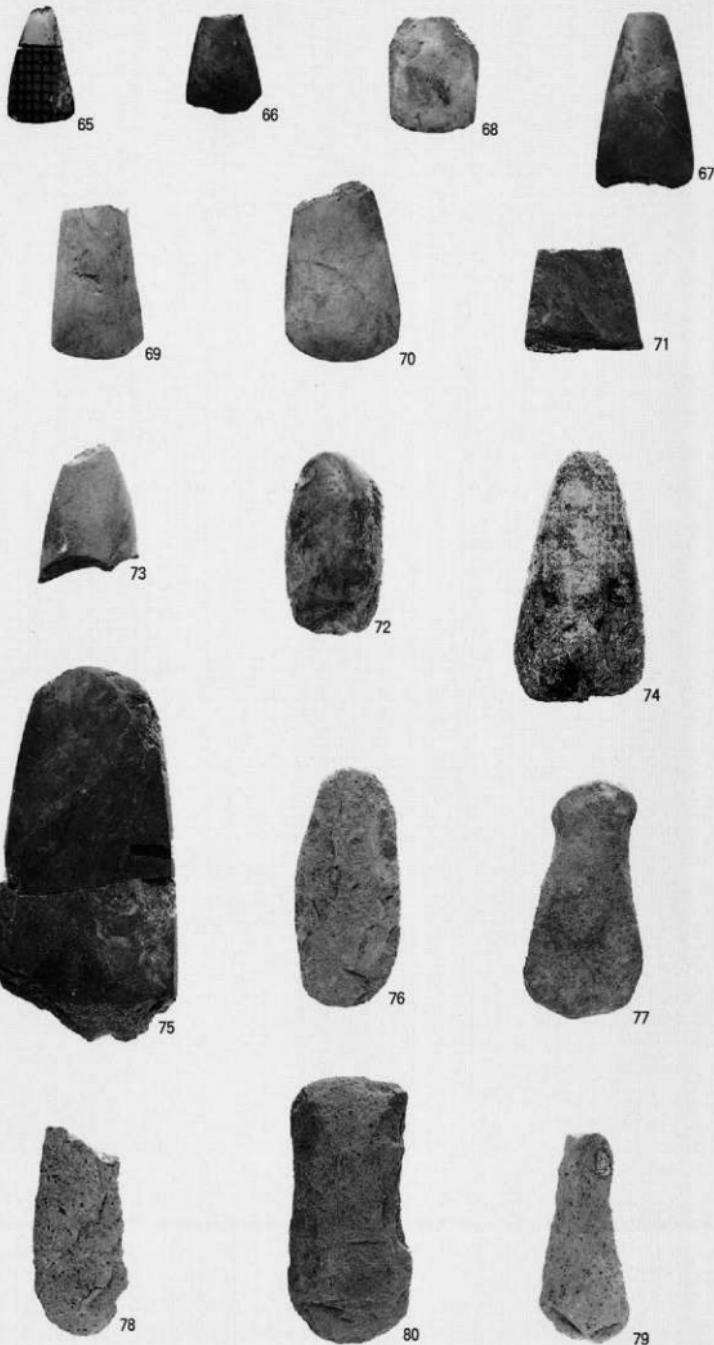
図版 8

遺物写真  
包含層



図版 9

遺物写真  
包含層



図版10

遺物写真

包含層



81



82



83



84



85



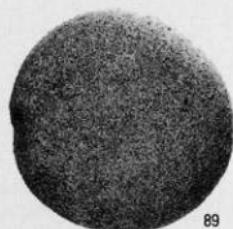
87



86



88



89



90

圖版11

遺物寫真  
包含層



91



92



93



94



95

## 報告書抄録

| ふりがな          | ふるやしきにいせき                    |          |      |             |              |                      |                        |                |
|---------------|------------------------------|----------|------|-------------|--------------|----------------------|------------------------|----------------|
| 書名            | 古屋敷II遺跡                      |          |      |             |              |                      |                        |                |
| 副書名           | 町道芦崎寺7号線改良事業に伴う発掘調査          |          |      |             |              |                      |                        |                |
| 編集者名          | 三鍋秀典、柴垣智子                    |          |      |             |              |                      |                        |                |
| 編集機関          | 立山町教育委員会                     |          |      |             |              |                      |                        |                |
| 所在地           | 〒930-0221 富山県中新川郡立山町前沢2440番地 |          |      |             |              |                      |                        |                |
| 発行機関          | 立山町教育委員会                     |          |      |             |              |                      |                        |                |
| 所在地           | 〒930-0221 富山県中新川郡立山町前沢2440番地 |          |      |             |              |                      |                        |                |
| 発行年月日         | 西暦1999年3月                    |          |      |             |              |                      |                        |                |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地                  | コ一ド      |      | 北緯<br>°' "  | 東經<br>°' "   | 調査期間                 | 調査面積<br>m <sup>2</sup> | 調査原因           |
|               |                              | 市町村      | 遺跡番号 |             |              |                      |                        |                |
| 古屋敷II         | 富山県中新川郡立山町芦崎寺字古屋敷            | 323      | 141  | 36° 34' 45" | 137° 24' 15" | 19960523<br>19960725 | 430                    | 町道改良事業<br>に先立つ |
| 所収遺跡名         | 種別                           | 主な時代     |      | 主な遺構        |              | 主な遺物                 |                        | 特記事項           |
| 古屋敷II         | 散布地                          | 縄文(中~晚期) |      | 穴           |              | 縄文土器・石器              |                        |                |

### 古屋敷II遺跡

—町道芦崎寺7号線改良事業に伴う発掘調査—

立山町文化財調査報告書 第26冊

発行日 平成9年3月31日

編集・発行 立山町教育委員会

印 刷 ヨシダ印刷株式会社

